

下級巫女、行き遅れたら

能力上がって聖女並みになりました

② 謎の男 ②

瀕死のところをハナによって
助けられた男性。
金髪碧眼の美青年だが、
怪しい動きをしている……

② マーティー ②

駐屯地の将来有望な若い兵。
ハナを慕っている。

② ガルン ②

駐屯地をまとめる総隊長。
いつも怪我をしてハナに
癒してもらっている。

② ルーシェ ②

王都へ向かう途中で
出会った少女。
何かにおびえているようで……

② マリーゼ ②

駐屯地で働く下級巫女。
ハナのことを敵視している。

素顔は……

金髪に紫の瞳の色白美人。

② ハナ ②

キノ王国の駐屯地で働く巫女。
普段は眼鏡にマスク、ひっつめ髪の
イケていない格好。
人々を癒すことを人生の目標としているため、
結婚する気はない。
力の程度が低い下級巫女だが、
長年の努力で思ったより能力が上がっている。

第一章 行き遅れ巫女、駐屯地で兵を癒す

「おい、隊長だ。また行き遅れ巫女のどこに行くつもりなんじゃないのか？」

「もっと若くてかわいい巫女のどこに行けばいいのに……隊長ならどの巫女選んだって誰も文句言えないだろう」

「そうだよなあ。髪をひつつめて、大きな眼鏡と大きなマスクで顔を隠した口うるさい行き遅れ巫女を、わざわざ選んで癒してもらいに行かなくても……」

「同情してるんじゃないやねえ？ モテない、彼氏もできない、結婚できずに年だけ食っちゃってさ」
君たち、聞こえますよ。

私の名前はハナです。ハナという名前の巫女。
行き遅れなんて名前になった記憶はないんだけどな。

確か、入隊三年目のぴーちくトリオですよ。大した怪我でもないのに、いつつもユーナんとこに癒してもらいに行ってるの、知ってますよ。

まったく。怪我や病気を癒すのが巫女の仕事とはいえ、若くてかわいい巫女も大変だ。無駄に力を使わされて。

ここはキノ王国の最南端。戦争の最前線の駐屯地だ。

……まあ、戦争といっても、隣のミーサウ王国とはほぼ睨み合ってるだけの状態で何年も経つ。だから、私たち下級巫女が配属されているテントにやって来るのは、戦争で傷ついた兵というわけではない。訓練の怪我や病気、森の獣や山賊による傷も癒している。

そんな巫女の能力は、誰もが持っているものではなく、生まれつきのものだ。

国民のすべての少女たちは、十歳になると神殿で癒しの力があるかどうかの検査をする。能力があれば、その魔力の大きさによって巫女としての立場が決まるのだ。

下級巫女、中級巫女、上級巫女、そして聖女だ。

下級巫女は、一番癒しの能力の低い者。かすり傷程度しか癒せない。

下級巫女よりも能力が高い者が中級巫女と呼ばれる。命に係わるような大病や大怪我を完治させることは難しいが、命をつなぎとめることはできる。

その上が上級巫女で、数はぐっと少なくなる。

そして、すべての巫女たちの頂点。一番魔力が大きく、一番癒しの力が強い者は聖女と呼ばれる。どんな病気や怪我也癒せるという話だ。

私は、一番力の弱い下級巫女。

十歳で見習い巫女となり、十五歳で巫女としてここに配属されて八年。二十三歳になる。

……もうすぐ二十四歳。

確かに、二十歳までには結婚して駐屯地を去る巫女がほとんどだから、行き遅れと言われても仕

方がないといえは仕方ないんだけど。

だけどね、大きな眼鏡と大きなマスクにひつつめ髪は、衛生的にも治療に一番向いてるんだよ。

治療に適した服装をしているという点で、褒められるならともかく、けなされるのは納得しかねますよ。

まったく。分かってないんだから。

「おいお前ら、隊長はハナ巫女が優秀だから彼女のところへ行ってるんだろ」

おや？

誰かが私のことを擁護してくれているようですよ？

長めの黒髪を後ろで結んでいる若い兵。

ああ、あれはマーティーだ。

マーティーは入隊四年目だっけ。

ふんふん、巫女をちゃんと見た目だけじゃなくて能力でも評価してくれるなんていい子だな。

「ハナ、すまないが、ちょっと足首をねんざしたみたいなんだ。癒してくれ」

駐屯地の中を歩いていると、大柄で粗野という言葉が似合う男に呼び止められる。

びーちくトリオの予言通り、隊長が来ました。

ただ切っただけという短い茶色の髪の毛。髭はどこどころ剃り残しがある。制服もきちんと身につけているのを見たことがない。上半身は半袖の生成りのシャツか、その上に前のボタンを留め

ることなく青い上着を羽織るだけ。

顔の造りはくつきりはつきりしていて、ちゃんとすればイケメンなのに……というのが皆の共通認識のようだ。

「足首をねんざしたと言いましたか？」

眼鏡の奥からガルン隊長を睨みつける。

「私、何度も言いましたよね？　いくら癒いよしですぐに痛みが引くからって、無理はするなど。ちゃんと時間をかけて治いよさない癖になりますよって……」

低い声が思わず出る。

「いやー、ははは。うっかり、そう、うっかりこの間ねんざしたの忘れて、おんなじ足でちよいと着地を決めたら……」

「うっかり？　忘れて？　ちよいつと？」

何度も言ったのに。

私の言葉、まるつきり右耳から左耳に流してること？　まったく、本当に、この人は……

「あ、いや、その……」

身長差三十センチ。上からがつり見下ろされてるし、体格も三倍くらい差がある。だけど私が睨みつける……いや、睨み上げると、隊長はじりじりと後ずさった。

「部下が教えを忘れ、指示を聞かず、命令をたがえたらどうしますか、隊長」

私がそう言うと、隊長はさらに後ろに一步下がる。

「ここに駐屯している兵たちの総隊長……一番の上司は確かにガルン隊長かもしれませんが、怪我や病気や体調管理に関しては、治療を行う私たち巫女がいわば上司のようなものだと思ってもらわないと。違いますか？」

そうなのだ。この身なりもどこか粗野でだらしない感じのする男は、こう見えても王都から兵をまとめるために派遣されている騎士様だったりするのだ。

しかし、騎士様と言えば花形職業なのに、なんで王都から遠く離れた隣国との国境——戦争の最前線の駐屯地に派遣されたんでしょう。断ることもできる立場だと思っただけ。

我が国キノ王国と、隣国ミーサウ王国は、お互い睨み合うだけで実際は戦闘になるようなことなんて、ここ十年はない。もういつそ、戦争終結宣言して仲良くすればいいのにつてくらい、平和と言えば平和。

ここは、近くの森の熊いぬや猪ぶた、時々山賊を退治する程度の、最前線という名の田舎いなか。ガルン隊長には騎士よりも似合っているというか、騎士が似合わなすぎてここに追いやられ……。まさかね。

「いや、ハナの言う通りで、面目めんぼくない」

「まったく、隊長ももう三十歳ですよ？　いい加減落ち着いていろいろ部下に任せればいいんですよっ！　あ、そうだ！　結婚したらちよつとは落ち着くんじゃありませんか？」

おっと、しまった。

「結婚……と言えば、ハナ、誰か紹介しようか？」

隊長が、ふと思いついたように口を開く。

あー、やつぱり。自分に跳ね返ってきたよ。

「ハナのようなベテラン巫女が抜けるのは痛いが、だが、その、そろそろ引き留めてもいいような歳でもないから」

まあ、こうして一人一人の心配をしてなんとかしてあげようという面倒見の良さが、ガルン隊長のいいところだったりするわけだけど。私のことはほっといてほしい。

「ガルン隊長、私の噂、聞いたことないですか？」

「噂って、アレ、マジなのか？」

ガルン隊長が哑然としている間に、さっさとねんざした足首に癒しを施す。

「はい。癒しました。これが最後ですからね？ もし同じ場所をねんざしても、次は包帯でぐるぐる巻きにして癒しませんからっ！ じゃあ、私、仕事があるんで失礼します！」

噂は聞いたことがあるんですね。だったら、なおさらほっといてくれたらいいのに。

さあ、仕事仕事。ガルン隊長に背を向けて、持ち場であるテントへと足に向けた。

巫女は五つの治療テントに分かれ、二交代制で働いている。

今の私の担当は第一治療テントだ。

「どうしよう、どうしよう……」

第二治療テントの裏側で、一人の少女がしゃがみ込んで頭を抱えている。

「あら、ユーナどうしたの？」

「ハナ先輩……わ、私……」

涙でぐしゃぐしゃになったユーナの顔。青ざめてひどく憔悴している。けれど、ここで働き始めた十五歳の時と比べてとても綺麗になった。ユーナは十八歳になったところだろうか。

ああ、知ってる。これだけ綺麗になった子たちを、私は何度も見てきたから。

「恋をしたのね。好きな人と、思いが通じたのでしょ？」

しゃがんで目線を合わせて尋ねると、ユーナがこくりと頷いた。

そっと、安心させるようにユーナの肩に手を置く。

「駄目だって、分かってたんです、でも、どうしても、彼と……気持ちを抑えられなくて……」

巫女の能力は好きな人と思いが通じるとなくなってしまう。具体的に言えば、キスやその先のことを経験すると——ということらしい。

「大丈夫よ。巫女が恋をして結婚して子供を生むのは、祝福されることなのかも。だって、巫女の生む子には優秀な巫女が多いからね。それは知っているわよね？」

ユーナが頷く。

そう。かつての聖女はみな、元巫女から生まれた子たちだ。だから巫女は能力を失うことを前提に恋愛も結婚も許されていて、歓迎されている。

「だけれど、巫女を辞めることはもう少し前に報告するべきだったわね。代わりの巫女が配属されるまで、担当していた第二治療テントの怪我人への、癒しによる治療が中断してしまうのよ？」

とは言ったものの、恋する男女は時として理性を失うものだど知っているし、下級巫女で癒せる

怪我や病気なんてほうっておいても治る程度なのだ。国としても、こういうことがあるのは暗黙の了解なんだろう。

そもそも、戦争の最前線に下級巫女を配属する理由は、集団見合いみたいなものなんだから。

農家の嫁にするより、国のために戦う兵の嫁に巫女を……ってね。

下級巫女は、兵たちが詰める駐屯地や訓練場などが主な職場。給料は人が一か月生活するのにギリギリな額だけれど、駐屯地ならば衣食住にまったくお金がかからないため貯金に回せる。仕送りしている子も多い。

まあ、少女たちも、あわよくば騎士様のお目に留まって玉の輿^{たまこ}を夢見て戦地に来るわけで。兵たちの傷を癒すために！なんて真面目に思っている子は少ない。

ユーナは真面目に考えているほうだったけど、でも、恋、しちゃったんだもんね。

こうして能力が消えてこれだけ涙を流すんだから。兵たちを癒せないことを悩んでるんだから。やっぱり、真面目だよな。

「大丈夫よ。代わりの巫女が配属されるまでは、私が第二テントの兵たちも癒すから」

「え？ でも、ハナ先輩は第一テントの担当で……患者は十人いるんですよね？ 魔力がとても足りないんじゃない……」

まあ、普通の下級巫女ならばそうでしょうね。だけど、私の場合……

「任せて。これでも巫女歴八年。行き遅れ巫女ですからね？」

ふふっと自嘲気味に笑ってみる。

私はもう二十三歳だが、ほとんどの巫女は、十五歳で国に仕え、二十歳までに引退していく。理由の多くは、能力を失うから。つまり、恋をして結婚をして引退する。二十歳を過ぎても巫女として働いていれば、行き遅れと揶揄^{やぶ}されても仕方がないのだ。

巫女の力は使えば使うほど、少しずつ上がっていく。まあ、それは微々たるものなのだが、八年も毎日休まずほぼ限界まで……時にはぶっ倒れるまで使うとかなり能力は向上する。

正直、最近では骨折も一回の癒^いいで治せていると思う。……まあ、本当に骨折しているのか、ただの打撲なのかは分からないけれど。

「あの、ハナ先輩は、ここを辞めないんですか？ 好きな人がいなくても、その、なんであんな風に言われても続けるんですか？」

本当の理由……。それを話したこともあつたけれど……。二十歳を過ぎてからは、適当な理由を話している。

「あら、噂を知らない？ 私は水の将軍が好きなの。彼以外の人と結婚したくないのよ？」

これが一番説得力のある……。というか、質問者のその先の言葉を封じるには便利な理由なので、最近はずばらこう返している。

「あの噂は本当ですか？ 水の将軍って、年に二度ほどしかここに来ないのに……。そりゃ、思いが通じれば、相手は公爵家の跡取りで、現役の将軍だから、玉の輿^{たまこ}ですよ。年齢は二十八歳なのにまだ独身。貴族のご令嬢や王女様までが彼のハートを射止めようとアプローチしているけれど、すげなく断り続けることから、水の将軍なんて呼ばれている、あの方を？ 年に二度とはいえ、私

たち巫女にはお顔を拝見するチャンスがありますし、庶民よりは近づけることもあるかもしれません。が……でも、あの、その……」

ああ、嘘の理由なんだけど、ユーナは真剣に考え始めた。

他の人のように、馬鹿な女だなんて頭から否定しようとしめない。馬鹿にはしないけれど、ユーナは必死に私を止めようとしているんだろうな。そりゃ、現実的に考えたらそんな夢を見て婚期を逃すよりも、もっと現実を見て身の丈に合った男性と幸せになればいいのって思うよ。そのほうが絶対幸せだろうって。

だから、ユーナは私の幸せを考えて言葉を探しているんだよね。

「うん。さすがにね、もう二十三歳だからね。今度、氷の将軍がいらっしやった時に一言も会話ができなかったら、あきらめようと思ってるのよ」

そして、戦地で下級巫女としての活動は引退するつもり。

八年間の給料はほとんど手つかずで貯めてある。引退したら、しばらくゆっくりしようかな。その後、神殿で能力を測ってもらって、中級レベルに達していれば神殿に仕えようと思う。神殿巫女は、神に嫁ぐと言われているから、結婚しなくても誰も何も言わないしね。

……そう、私は、一生誰とも結婚するつもりはない。

あ、ちなみに上級巫女は王都で貴族連中相手の治療院に所属して、貴族と婚姻を結ぶことが多い。聖女が生まれると家の格が上がるので、聖女を生む可能性の高い上級巫女は人気があるらしい。

聖女はお城住まい。主に、王族の治療にあたる。

せっかく、高い癒しの能力があるのに、王族の治療しかできないなんて……

私が、巫女であり続けたい理由。

癒しの能力を失いたくない。この能力があれば、もうあんな思いをしなくて済むはずだから……

「あの、ハナ先輩っ」

いつの間にかユーナの涙は止まっていた。少し目が赤いのは泣いたせいだろう。

「来てくださーいっ」

手首をがしっとつかまれて、巫女テントに連れて行かれる。

この戦地に配属されている巫女は二十人いるのだけど、それぞれ五つのテントに分かれて生活している。

「私、もうここにはいられないし、荷物を持っていくのも大変なので、ハナ先輩に差し上げますっ！」

と、ユーナが荷物箱からワンピースを取り出して私の胸に押し当てた。

とても戦場には似つかわしくない、春の光を思わせる柔らかな黄色いワンピース。

「サイズ、合うと思うので着てみてください」

「え？ いや、あの、サイズが合っても、私にこんな綺麗な色のワンピースは……」

もう、私二十三歳だよ。行き遅れのおばさんなんだよ？

「先輩っ！」

ユーナが怖い。

私は言われるままワンピースに袖を通す。……胸元が、少し布が余ります。丈は問題ないかな。鏡を見ると、ダサイおばさんが頑張って若作りした滑稽な姿が映っている。

「座ってください！」

ユーナの気迫に押され、私は鏡の前の椅子に座る。

「ハナ先輩はいつも髪の毛を一つに結んでお団子にしていますが、このワンピースの色にも負けない綺麗な金髪をしているんです。下ろさないと損です」

……髪を下ろしていても治療の邪魔になるのです。

という私の言葉は見透かされていたのか、サイドの髪をみつあみにして背中に回し、後ろの髪が前に落ちてこないようにセットしてくれた。

「この大きな眼鏡も、必要ない時は外せばいいんですよ。先輩の瞳は、朝のうっすら紫がかった空の色みたいでとても綺麗です。それにまつげも長くて大きな瞳」

眼鏡は、何も視力を正すためではない。治療中に血や汗が目に入らないようにガードするためのもので、巫女に支給されるものだ。……眼鏡をかけていると、目がかゆくなるのが少なくなつて気に入っているんだけどな。

「それに、まるで貴族のように白い肌。マスクで隠しているなんでもつたいたないです」

八年間もほぼテントの中で治療していて、ほとんど日に焼けていないからだ。病人のようで気持ちが悪い白さだと思う。それを隠すためにマスクをしていると言っても過言ではない。

健康的な肌色がうらやましい。

あ、もちろん病気がうつらないというのが、本来のマスクをする目的だ。

ちなみに、うっかり誰かとキスをして巫女の能力を失わないようにという理由もあるんだけど、そもそもキスだけでは能力はなくならないという説もある。そのあたり、はっきり誰かに聞いたことがないのでよく分からない。

「ほら、ほおに少し紅を入れるだけで、とても綺麗です」

ああ、確かに。

ユーナがちょっと化粧をしてくれただけで、白すぎる肌も血色がよいように見える。

「この姿を見たら、ハナ先輩をいき遅れ巫女なんて言う人はいなくなると思うんです。先輩、これも、これも差し上げますから、次に氷の將軍が来る時は、絶対、ちゃんとした格好をしてくださいねっ！ 約束ですよっ！」

ユーナが、私の手に、今使った化粧道具を押し付ける。

それからワンピースに合った黄色のリボン髪を髪に結んでくれた。

「ありがとう」

氷の將軍の話は嘘だけど、ユーナの気持ちはとても嬉しくて、素直にお礼の言葉が口に出た。

あ、そうだ。お礼に、私もなにか渡そう。

ユーナのテントを出て、自分のテントにもらった荷物を置きに向かう。すると、テントを出て少し歩いたところで、一人の兵から声がかかった。

「ど、どちらに行かれるのですか？ 私がご案内いたしますよ？」

私より頭一つ分背の高い細い兵だ。細いと言っても、無駄な筋肉がついていないだけで、鍛えられた体をしている。兵にしては珍しく髪が長めで、肩に届く髪を後ろで結んでいた。目にかかりそうな黒い前髪の奥からは、切れ長の黒い瞳が見えている。

槍使いのマーティーだ。先ほど私を擁護してくれた若い兵。

「マーティー、もう手の豆の傷は大丈夫？」

槍の訓練を熱心に行うあまり、何度も何度も豆がつぶれて、時には化膿してひどいことになっていた。癒して傷をふさいでもすぐにまた豆をつぶすのだ。

訓練を繰り返すうちに、手の皮が厚くなればそんなこともなくなる。『僕はまだ未熟なのです』と言っていた姿を思い出す。あれはもう四年も前のことになるだろうか？ えーっと、今は十九歳かな？ 二十歳になったのかな？

「は？ 手の豆？ は、はい」

マーティーが手のひらをこちらに見せてくれた。

「ああ、本当に、立派になったね」

私はマーティーの手を取り、かつてジユクジユクだった手の豆の場所をそっと指の先で撫でる。硬い。硬くて分厚い皮がしつかりとした手。

「あ、あの、ぼ、僕、なんで、名前を、あつと、えーっと、あ、あなたはその」

マーティーの手を離して、顔を見る。

おや？ 焦ったような戸惑いを含んだ表情をしている。

ああ、四年も前の未熟だったころのことを言われても困りますよね。

「頑張ってるね」

私はぺこりと小さくお辞儀をしてテントに向かった。

もらった化粧道具などを置くと、もう一度テントを出て、森の中へ入る。

前線基地となっている場所の前方が敵地。

右側には切り立った崖がそびえたち、左側には湖が広がる。背後は森。森と言っても、王都にまで通じる道が整備されているので、入ったからといって迷うことはない。

道を三十分ほど進み、獣道に入る。

確か、この先に綺麗な花が咲き乱れる場所があったはず。

お礼と、恋が成就したお祝いに、ユーナに花束を贈ろう。

以前、微かな風が花の匂いを乗せてきたので、見つけた場所だ。そろそろ花の香りが――

「え？ この臭い……」

どういうこと？ これは、花の匂いじゃない。

慌てて周りを確認する。

この臭いは、血だ。戦場で、治療テントで働く私が間違えるわけがない。

いったい、どこから？ なぜ、この場所で血の臭いが？

戦場は駐屯地からさらに五キロほど離れた場所だ。戦争とはいえ、敵国と兵たちが睨み合っているだけの状態でほぼ十年。

だからこそ、巫女と兵の見合いなんてのんきな話も出ているわけで。

怪我人が絶えないのは、訓練と、森に現れる狼などの危険な動物の駆除、盗賊などの討伐、それから時々現れる敵側のスパイとの戦闘が主な理由だ。

こんなところで血の臭いという……狼？ 盗賊？

と、とにかく逃げないと！ 物音を立てないように踵を返した瞬間、小さな音が聞こえてきた。

音のしたほうを確認すると、木々の間から馬の姿が見えた。

花々が色とりどりに咲き乱れるその先の木々の間に、馬の姿。馬は臆病な動物だ。狼などの危険な獣がいれば逃げ出しているはず。

ひとまず危険な獣がいるわけじゃないと分かかって、ほっと胸を撫でおろす。

でも、なぜこんな森の中に馬が？ 馬の休憩のため水場を求めるような場所でもない。馬にはちゃんと鞍が付けられているのが見える。野生の馬というわけでもなさそうだ。

……馬に、乗っていた人はどこ？ じりりと手に汗が浮かぶ。馬だけなんていうことがあるはずがない。そして、血の臭い……

あたりを用心深く探るけれど、人の姿は見当たらない。馬に視線を戻すと、何かしきりに足元を気にしているように見える。

もしかしたら、乗っていた人が落馬して怪我でもしたのかもしれない。

急いで馬のもとへと向かう。

「血……っ！」

馬は私の姿に気が付くと、小さくいななき、心配そうに足元に倒れている人物に鼻先を寄せた。

「あああ……」

すごい血だ。

黄色い花の上に、鮮血がしずくとなつて散っている。

その中心には、男の人がうつぶせで倒れていた。周りの地面は血を吸って、土の色が赤褐色に染まっている。

生きている？

近づけば、背に大きな切り傷。剣で切られたであろう傷だ。

治療テントに運ばれてくる怪我人たちに、こんなひどい怪我をした人はいなかった。

「私には無理かもしれない……完全に癒すには上級巫女でないと……ううん、出血を止めるだけでも中級巫女の力が必要だわ」

人を呼ぼう。いや、呼びに行っても、テントには下級巫女しかいない。中級巫女が来るまでに、

この傷じゃ……

「大丈夫ですか？」

すくむ足。

目の前で人が死ぬかもしれない。

もう、嫌だ！ 幼いころの思い出が脳裏をかすめる。

あの日、突然、生まれ育った村を病が襲った。



次々に死んでいく人たち。なすすべもなく、ただ、命が尽きていく人たちを見送ったあの時……人々があつという間に、倒れていった。巫女のいない村。巫女に助けを求める、そんな時間もなく……次々と息を引き取っていく村人たち。冷たくなっていく……。助けを求めに行くとは出立の準備をしていた父も、村人を看病していた母も、母が看病していた隣の家のおばさんもおじさんも仲が良かった幼馴染の子も……。あの、人の冷たさは忘れられない。

ぎゅつとこぶしを握り締める。

違う、今の私は幼い子供じゃない。何もできなかった子供じゃない。

私は巫女だ。癒しの力のある巫女。

倒れている男の人に再度声をかけても返事はない。

そつと男の人の鼻の下に指を持っていく。……呼吸は、ある。まだ、生きてる。

「生まれ……」

私の力ではどこまで癒せるのか分からない。だけれど、せめて血を止めることができれば……

巫女の力が上がっているという自覚はある。もしかしたら中級巫女レベルになったかもしれないと思ったのは私じゃないか。

バクバクと高鳴る心臓。落ち着こう。

手を傷の上にかざし、目をつむる。集中するんだ。体の中をめぐる魔力。ああ、温かくなってきた。神様、どうか、癒しの力としてこの魔力を彼に……！

【癒し】

頭の中がふわりと浮くような感じ。
何、これ、初めての感じだ。ああ、貧血のようなこの感じ……。神様、私の血が彼の癒しになるなら……

お願い、血よ止まれ。傷口よふさがれ。
死なないで！ 生きて！

——どれくらいそうしていただろう。

「巫女……？」

小さな声に、はっと目を開ける。

「背中が、ふさがっている……。君が……？」

倒れていた男の人が意識を取り戻して私を見た。

「ああ、駄目だ。まだ目がかすんでいる……。君は、誰だ？ ここは……治療院ではないな……」

「よかった……。あの、私では力不足です。もし、移動が可能であれば治療院に行つてすぐに中級巫女に……。いえ、できれば上級巫女に治療してもらつてください」

男の人の服装は、騎士や兵とは違うけれど、いい布を使っているのはすぐに分かった。

カフスの付いた白いブラウスに、なめし革でできたベストとベルト。それから、何か所も体に合わせて布を切り返し、動きやすいように作られた茶色のズボンとこげ茶のブーツ。色合いこそ地味で旅人っぽい服装ではあるが、明らかにお金がかかっている。きっと上級巫女に診てもらえる身分だろう。

涼やかな目元。まだ視力が回復していないというのでぼんやりした目つきをしているけれど、美しい目だと思つた。

絹糸のように艶のある金の髪。血を失いすぎて顔色は悪いけれど、もともととても綺麗な肌の色をしているように見える。高い鼻に薄い唇——どのパーツをとっても女性が喜びそうな造りをした顔だ。

そう、色男とでも言うのだろうか。人を魅了する容姿とはこういう感じなのかな。

馬が、意識の戻った男の手を遠慮気味にべろりと舐めた。

「ああ、ルシファー、無事だったか……。治療院か……。しばらくすれば視力も戻るだろう。ルシファー、ひとつ走り頼むな」

男が、馬に話しかけた。馬の名前はルシファーというんだ。

意識もすっかりしているようなので、もう、大丈夫そうです。

「あーっ！」

ほっとした私は、ふと視線を自分の足元に落として悲鳴をあげる。

「ん？ どうした？」

「どうしよう……。ワンピースが血まみれに……」

ユーナにもらった黄色のワンピースが、地面に広がっていた男の人の血を吸ってひどい状態になっていた。

「ああ、すまない。私のせいだな。弁償しよう……」

男の人が、ゆっくりと上体を起こす。

「ああ、駄目です、まだ体を起こしてはっ！」

たくさんの血を流したのだ。貧血しか私は経験したことがないけれど、それですら立ち上がるのは大変だった。

ふらっと男の人の上体が倒れかかる。

「危ないっ！」

とっさに手を出して、倒れそうな男の人を体で支える。

「すまない……」

「いいえ。まだしばらく横になっていたほうが……」

「私を抱き留めたせいで、さらに服に血が付いたんじゃないか？」

え？ あ、確かに……。裾だけでなく、上半身にも血が付いてしまっている。

「それから、もう一つすまない。すぐに弁償したいが、どうやら金を奪われてしまったらしい」

「盗賊？」

金を奪われた？ 盗賊に襲われたってことかな？

「……今度会った時でいいか？」

私は、いらぬ、と小さく首を振る。ああ、彼はまだ目がぼやけていると言っていた。ちゃんと言葉にしないと。

「いえ、弁償はいいんです」

「では、代わりに何かお礼をしないと……」

お礼？ 傷を癒いしたお礼ってことだろうか？

「いいえ、お礼なんて必要ありません」

なぜか、男の人は、ちよつと苦虫を噛みつぶしたような顔をした。お礼を断っただけなのにどうして？

「では、お礼の“代わり”に何を要求するつもりかな？ 命を助ければ“望み”が叶うとでも？」

はい？ 何を言っているのでしょうか。ずいぶん言葉に棘とげもある。

「何も要求はしません。私は巫女です。目の前に傷ついている人がいれば、癒いすのが仕事です」

「巫女の仕事……？」

男の人が私の言葉をオウム返しする。

「それに、私の望みはもう叶いました」

「は？」

男の人がびっくりした顔をした。うん、イケメンって無表情なイメージがあったけれど、いろいろな表情するんだなあなんて、新しい発見をしてちよつと楽しくなった。氷の將軍なんて呼ばれている人もかっこいいって噂ですが、氷のように冷たく無表情なんだろうか？ 顔を見たことがないから分かんないけど。

「私、あなたを助けられないかもしれないって思ってた怖かった。ここには他に人がいないから……。私の力であなたを癒いせてよかった」

男の人の肩が震えた。表情が少し柔らかくなった気がする。だけれど、何かを警戒するような緊張は持ったままで。

「君の望みは、何？」

私の望み。

「一人でも多くの人を救いたい。今、あなたを救うことができたので、私の望みは叶いました。あなたが死ななくてよかった」

死ななくてよかった。

その言葉を口にした時、ほっとしてちよつと声が震えた。本当によかった。今頃怖さが押し寄せてきた。私の力が足りなかったら……死んでいたんだ。

「死ななくてよかったと……それが本心なのか……」

ようやく男の人の緊張が解けた。もしかしたら、やっと命が助かったと安心したのかもしれない。

「ああ、私は……君のような巫女を知っている……。顔を、見せてほしい」

え？ 私のような巫女を知っている？

知り合いに、あなたのようなイケメンはいなかったと思うんだけど？

「ああ、見えない。まだ目が。ぼんやりと……春の色……綺麗な……」

男の人の手が私のほうへ伸びてきた。指先が小刻みに震えている。

「大丈夫ですか？」

震える手をそつと取って両手で包み込む。

「綺麗な服に、血の色が……私に、弁償をさせてほしい。私は、君に……」

あれほど血を流したのだ。傷はふさがり血が止まったといっても、まだいろいろと無理ができるような状態じゃないはず。それなのに私の服の心配をするなんて。

「大丈夫です。もともとこのワンピースは、着る機会がもうないと思うので……ただ、その……このワンピースをくれた人がこれを見たら悲しむかなと……」

あ、しまった。余計に気を遣わせちゃう。

男の人の手がぴくりと小さく動いた。

「すまない……。大切な人からの贈り物だったのか……。それを……ルシファー、私のマントを」

男の人が馬に話しかけると、馬が黒いマントを口にくわえて男の人に渡した。

言葉が分かるの？ なんて賢い馬。

「これを使ってくれ。これで全身覆えば、服についた血は見られないで済むんじゃないかな？」

男の人がマントを私に差し出す。

「ありがとうございます。少しお借りしますね。あの、じゃあ、ちよつと急いで着替えてきます。すぐに洗えばシミにならないかもしれないですし……」

男の人からマントを受け取り羽織ると、足元までしっかりとあった。

ああ、背が高い人なんだな、と思いながら森を後にする。

そうだ、私、ユーナに花を渡そうと森に来たんだ。けれど花を摘むのは後ね。

まずは、急いで着替えて、彼に何か口に入れる物を持ってきてあげよう。その時にマントも返せ

ばいいわよね。

しばらく歩くと、駐屯地のテントが目に入る。巫女のテントは前線から一番離れた場所に配置されているので、そちらに向かおうとすると……

「おい、お前、何者だ！」

兵の一人が私を呼び止めた。

振り返れば、兵ではなくこの駐屯地をまとめる総隊長のガルンだった。

「ガルン隊長、またこんなに打撲を……」

むき出しになっている両腕に、何か所か赤い腫れが見て取れる。

隊員の訓練をするのはいいけれど、怪我をしないようにできないのかしら。思わずいつものように説教しそうになって、今はそんな場合ではないと思いつつ出す。

すつとマントから手を出して、腫れているところに癒しを施す。

【癒し】

「ん？ お前、新しい巫女か？ その、聞いてないが……」

ガルン隊長が首を傾げた。

新しい巫女？ 違うけれど。朝も会ったハナですけど？ ああ、治療服着てないや。いつもの服を着てないだけで誰か分からないとか、ガルン隊長らしいというかなんというか。

ぼやーとし始めたガルン隊長に首を横に振って、私はさっさとテントに向かう。

マントを外し血まみれのワンピースを脱ぐ。それから、いつものこげ茶の治療服を身に着ける。

「あ……」

ワンピースを脱ぐ時に手や顔に血が付いてしまった。

洗面桶に水を汲み、顔と手を洗い、鏡で確かめる。

「せつかくユーナにしてもらった化粧も落ちちゃったわね……」

鏡に映っているのは、病的に白い不気味な顔。こんな顔じゃあ、治療している私のほうがよっぽど病人みたい。そんなことを思いながら、いつものように髪をまとめ、眼鏡とマスクをする。

それから籠にワンピースを入れ、その上にマントをかぶせて持つと、水とパンも持ってテントを出た。

「おい、ハナ」

テントを出るとガルン隊長がいた。

「人を見なかったか？ その、なんか、知らない顔だ」

知らない顔？ もしかして、あの怪我で倒れていた男の人のことかな？

そういえば、なんでこんな場所に？ 使者か何かで、ここへ向かっている途中で盗賊に襲われたってことかな？ あれ？ 待って、盗賊に襲われたってことは……

「あの、ガルン隊長、近くに盗賊が出たって話は？」

「ああ、そういえば目撃情報があって、今第二部隊が討伐に出たぞ？」

そうなんだ。すでに対策が立てられているなら大丈夫だよ。

「隊長！ 来てください」

「ん？ ああ。ハナ、話の途中ですまない。仕事だ」

ガルン隊長は部下に呼ばれて去っていった。

ああ、急がなくなっちゃ。

森に入り、花畑に行く前に川に寄る。

ユーナからもらった黄色のワンピースを必死に洗う。……駄目だ。やっぱり綺麗には落ちない。

ごめんね、ユーナ。

落ち込む足取りで花畑に着く。

あれ？ 男の人が倒れていた場所には、すでに人の姿も馬の姿もなかった。

血が染みていた地面には土がかぶせられている。

「いない……」

マント、返せない。どうしよう？

でも、馬もいないっていうことは、どこかへ移動したってことで。

「地面に土をかぶせていくことができるくらい、回復したんだよね？ 視力も戻ったのかな。よ

かった。もう大丈夫そうね……。よかった……」

人が死ぬところなんて見たくない。もう、これ以上、誰も失いたくない。

だから、私は、巫女の力で一人でも多くの人を救いたいんだ。

巫女の力を失わないためにも、私は……行き遅れの巫女でいい。

次代の巫女を生むことよりも、自分が巫女でい続けたい……

さてと。仕事に戻ろう。

第一治療テントの担当患者十人に癒しを与える。

病人が六人。完治まで四、五日かかる病気が、下級巫女が癒すと二、三日で回復するようになる。

全力で癒さず、二、三日かかるように、癒しの量を調整する。全力を出して癒すと、一瞬で回復するため、

「おい、おまえ、仮病じゃなかったのか？ 仕事に戻るぞ！」

となる。連れて行かれた兵の悲壮感漂う顔を見てから、全力で病気を癒すのはやめた。

テントで治療を受けている二、三日というのは、彼らにとつて貴重な休みでもあるんだろう。発熱時や痛みが一番辛いところだけ、癒しで楽にしてあげる。それくらいがちょうどいい。

怪我人は四人。全員骨折だ。これも、癒しすぎないようにする。

下級巫女なら、痛みを感じなくなるようにするだけなだけで、たぶん今の私は、骨折も治せると思う。でも、骨折は時間をかけて治したほうが骨が強くなるみたいで、一日で直した人がまたすぐに同じ箇所を骨折してテントに運ばれてきてからは、ゆっくり治すようにしている。

……まあ、骨折なのかどうかの判断は専門家じゃないので、たぶん……だけど。

さて、終了。次にユーナ担当だった第二治療テント。第二テントは主に切り傷の治療を行う場所だ。

「うげ、なんで行き遅れ巫女が？」

テントに顔を出した途端に、兵の一人が顔をしかめた。ぴーちくトリオの一人だ。

「マジか！　なんで、ユーナちゃんは？」

もう一人が残念そうな声を出す。

切り傷の場合、癒し魔法の他に、包帯を変えたり消毒したりと、手当ても行っただけ……

「安心してください。私は、この道八年のベテランですから。腕は確かです」

行き遅れと言ったぴーちく一号の腕を取り、包帯を巻かれた箇所をべちんと叩く。

「いてっ……って、痛くない？」

手が触れる瞬間癒し魔法をかけたから、当然です。

私は巻かれていた包帯を取って、傷のあったであろう場所を見る。

「すっかり治っているようですね。じゃ、訓練に戻ってください」

にこっと笑ってひらひらと手を振る。

「え？　あれ？　まだあと三日くらいはかかりそうだと……ってことは、もうあの地獄の訓練に？」

「さて、次に行き遅れの治療を受けたいのはどなた？　あ、そうそう、ユーナちゃんはこの卒業します。代わりに人が来るまで、大ベテランの私が担当しますので。さあ、一日も早く訓練に復帰したい人は他にいませんか？」

別に、行き遅れ巫女だと嫌な顔をされたから怒っているわけではない。

若くてかわいい子に手当てをしてもらいたいという気持ちも分からなくはないし。

ただ、治療を受けられるということに対して、感謝の気持ちがないどころか、治療する人をえり好みし、不満を漏らすことが気に入らないのだ。

……治療が受けられずに命を落とす人がいるなんて、想像できないだろう。きつと……

「うわー、怖い怖い。誰だよ、行き遅れ巫女怒らせたの」

「おい、お前治療してもらえよ」

「あ、包帯は自分で替えますから、はい！」

「あ、俺も。怪我してるの足だから、自分でできる！」

はい、そうですか。それは仕事が楽そうです。

「包帯を外したら新しいものに変える前に見せてください。癒しますから」

「はいっ」

皆素直に返事を返してくれる。……って、若干おびえてる？

そんな時、一人の若い兵が傷を見せに来た。左手の内側の切り傷だ。同じようなところに何か所も古傷がある。

「君、とっさの時に左手を出す癖があるみたいだね。ちょっといいかな？」

そんなに繰り返しとっさがあるとも思えないし、痛い目にあっているのに繰り返すってことは……

私は若い兵の右目を手で覆って、反対の手の指を離れた位置で見せた。

「何本か分かる？」

同じように左目を覆って簡単に視力を検査する。

「やっぱり。左右の視力が違うから距離感がつかめないのね。癒しを……」

悪いほうの目に癒しをかけ、もう一度指が何本見えるか尋ねると、今度は正しく答えた。視力が回復したようだ。

「あ？ え？ 俺、目が悪かったのか？」

片方だけ視力が悪いとなかなか気が付かない。

「時々頭痛もなかった？ 悪いほうの目に負担がかかると頭痛が起きることもあるそうよ？」

「確かに、あった。あれも目のせい？ ああ、すげー、なんか見え方が違う。早く練習したい」

とはいえ、見え方が変わったばかりだと日常生活でも距離感の変化があつて危ないので、すぐに練習に戻ってもらうのは危険。あと二日は完治まで時間をかけよう。

傷口は少しだけよくなる程度の癒しに。

「す、すげっ！ これがベテランの実力……！ なあ、巫女様、巫女様。俺、なんかよくこつちの足のこの辺痛くなるんだけど」

巫女様？

「歩き方に問題があるかもしれませんね。重たい荷物をいつも同じほうの手で持ち歩いたりしてませんか？ もしそうなら、時々左右を入れ替えたほうがいいですよ」

「すげー！ 確かに！ 俺、補給訓練の時、いつも左肩に担いでるわ。先輩が左右に分けて担いでいるのはバランスを取るためだけじゃなかったのか……！」

「なー、巫女様、俺、俺も教えてくれっ！」

うーん。基本、病人じゃなくて怪我人だからか、第二治療テントの人は元気ですね。

と思っていたら、テントの外からも元気な女性の声が聞こえてきた。

「あら、巫女様なんて呼ばせるなんて、さすがですわね、ハナ先輩」

「そりゃ、女王様になった気分が味わえるんなら、なかなか巫女を辞めたいと思わないかもしれませんわね？」

は？ 女王様？

テントの入り口を見れば、二人の少女が立っていた。

一人は、燃えるような鮮やかな赤毛を持つ、十八歳のマリーゼ。第四治療テントの下級巫女だ。

もう一人は、マリーゼの従妹だという、今年配属されたばかりの十五歳の子だ。

「ですが、行き遅れなんて言われる前に辞めたほうがよかったですんじやありませんか？」

「マリーゼお姉さま、この方がハナ先輩なんですわね。聞いてた通り……私もこうならないように頑張りますわ」

マリーゼは何を話したんだろう。従妹の顔には、ニヤニヤと馬鹿にしたような表情が浮かんでいる。

「ちやほやしてもらえるのも治療が目的ですから、ハナ先輩勘違いしないほうがよろしいですよ。女性として認められているわけではありませんから」

「くすくす。お姉さま、女性は女性ですよ。ただ、二十二を過ぎたら恋愛対象として誰も相手にし

ないというだけで」

「あら、そうでしたわね。ハナ先輩は、確か……そう、二十四歳でしたか？」

棘のある二人の言葉だけど、私は何の感情も湧かない。恋愛対象として相手にされないなんて、私は悲しいどころか、嬉しいくらいだ。だって、一生結婚しなくて済む。巫女の力を失うことはないのだから。

「まだ、二十三歳です。ところで、二人は何しにこちらへ？」

私は全然平気なんだけど、私たちのやり取りを見ている兵たちの顔が青くなったり白くなったり忙しいので申し訳ない。

こういう女性同士のいがみ合いが、取っ組み合いのけんかにまで発展することがあるのを彼らも知っているんだろう。……実際八年の間に何度か遭遇した。誰々は私のことが好きなのよ、とか……そういうの。

「ユーナが急に辞めたから、第二テントの手伝いに回されたんですわ」

「そうです。マリーゼお姉さまは、下級巫女としては癒しの力が強いので」

ああ、そういうえば、そんな噂を聞いた。

「では、お任せします」

包帯をほどいて腕を出している兵の前にマリーゼが立つ。

【癒し】を」

傷に手をかざすと、みるみる傷口がふさがっていく。

「おお！ ふさがった！ あつという間に怪我が治っちゃった！ すげー！」

ああ、確かにこれはすごい。

中級巫女レベルはありそうだ。でも、マリーゼの額にはすでに汗がにじみ出ている。

「次は俺！ 俺も頼む！」

「きよ、今日はこれでおしまいですわ！ ほら、他の人の包帯を交換しなさい」

従妹に命じると、マリーゼは出て行ってしまった。

……一人の治療がやつとみたいだ。命に別状ない人たちがばかりとはいえ、一人を治療しただけで他の人の治療がおろそかになってしまっただけはない。

魔力の回復は疲れを取るみたいな感じなんだよね。ちよつとした疲れなら少し休めば回復する。でも、倒れそうになるくらい魔力を使えば、一晩寝ないと魔力は回復しない。

マリーゼのあの様子じゃ、ちよつと休んだらまた癒せるって感じでもないよね……

【癒し】を……」

残りの四人の患者に力を抑えた癒しを与える。油断すると、傷口から悪いものが入って死んでしまうこともある。下級巫女の小さな癒しでも、悪いものが入るのを防ぐことはできるのだ。

「あー、大丈夫、俺、自分で巻けるよ」

入ったばかりの従妹は、包帯の巻き方も知らないらしい。見習い巫女時代に何を学んだのか。あまりにも従妹の手際が悪いので、つい手を出してしまった。

「まず、端はこうして、それから、巻いてある状態のまま少しづつ伸ばして、最後はこうね。きつ

くしすぎると血の流れが悪くなるし、緩くしすぎるとは外れてしまうので……そのあたりは、巻かれている人にきつすぎないか、緩すぎないか尋ねながら巻けばいいわよ」

簡単にアドバイスしながら見本を見せる。

「ふんっ。憐れですわね？ 醜女って」

従妹の口から、お札の言葉の代わりに嘲りの言葉が飛び出た。

えーっと。教えてあげたのに……と、思ったのは一瞬で。私が勝手に教えたんであって、「してあげた」というのは彼女にとつては余計なお世話だったのかもしれない。

「あれ？ うまくできないですう」

「ほら、こうするんだよ」

「え？ こうですか？ えーっと、あれえ？」

手取り足取り、兵たちに教えてもらって楽しそうです。はい。余計なお世話決定ですね。

第二治療テントを出て自分のテントに戻る。

あれ……？ 足元がふらつく。癒し魔法を使いすぎた時に起こる魔力欠乏貧血だ。

テントに着いてすぐに寝袋に倒れ込む。最近では、十人や二十人癒したくらいでこんなふうになることはなかったんだけど……

ああ、そうだ。森の中で倒れていた人を助けた時に、大量の魔力を使ったんだ。

あの背中の傷は、表面の皮膚を傷つけていただけではない。かなり深いところまで達していた。

幸い内臓は無事だったみたいだけれど、骨も見えていて、その一部も切れていた。よく、私、あれ

を癒せたなあ……。ふふふ、必死だったから。

そんなことを考えながら、私はいつの間にか眠ってしまった。

第二章 行き遅れ巫女、町人を癒す

「ハナ先輩、起きてください。緊急招集です」

ユーナの声で目が覚めた。

ああ、昨日はあれから爆睡してしまったようだ。

「緊急招集？」

眠い目をこすり、広場へ向かった。広場には兵たちのおよそ半分と、巫女全員が集まっている。

広場の前に設置された台の上に、ガルン隊長が上った。

「昨日連絡があった。騎士に欠員が出て、補助要員を募集するらしい。騎士になれるチャンスだ」
ざわりと場が揺れる。

十歳になった女子が巫女としての才能があるか検査を受けると同じく、男子は十歳になると兵や騎士としての才能があるか検査を受ける。

兵になるには、才能があることその一点だけだが、騎士ともなると、才能と実力の他、家柄もしくは手柄が必要となるのだ。

「採用試験を受けることができる者は、二十三歳までで各隊、三番までのナンバーズ。家柄は問わない」

ざわざわとさらに人の声が大きくなった。

「あー、駄目だ。三番までかよー」

「そうだよな、簡単に騎士になれるわけない」

「お前、受験資格ありじゃん。受けるよ！」

剣、弓、槍、それぞれには優秀な順に番号が振られている。一番弓、二番弓……と呼ばれる、十番までがナンバーズと称されていた。それ以降はナンバーなし。数字が小さくなるほど優秀で、給料も高くなるため、皆ナンバーズを目指す。

五千人いる兵は、百人ずつ五十隊に分かれている。五十隊で剣、弓、槍——それぞれ三番までのナンバーズは、合計四百五十名いる。だが、ベテランがほとんどだ。二十三歳までの若手で三番までという……

「該当者は四十八名。騎士になれば給料は上がるが責任も増える。そして、勤務地は選べない。王都とは限らず、どこへ派遣されるかは分からない。それから……中途採用される騎士への待遇は、あまり期待するな」

騎士は勤務地を選べない？ ガルン隊長ほどの実力があってもってこと？ ——もしかして、こ

の駐屯地の総隊長として左遷されたって噂、本当なのかな？

「希望者は明日までに私に言うように。それから、巫女も二人同行してもらう。自薦他薦は問わない。誰が行く？」

急に話が巫女に振られた。

「えー、行き先は王都だよな？ 王都、行ってみたい」

「でも同行って、王都まで馬車で移動するの？ 何日かかるのかな？ 大変そう」

「各隊の三番までと言ったらエリートだよ。エリートと仲良くなるチャンスだ」

「それどころか、将来の騎士様だったりするかも」

「私、行こうかな」

「ねえ、一緒に行こうよっ」

と、巫女たちが色めきたつ中、いち早く手を挙げたのはユーナだった。

「はいっ、ガルン隊長っ！」

「なんだ、君は確か昨日……巫女を辞した……」

「はい。ユーナです。ハナ先輩を、ハナ先輩を連れて行ってくださいっ！ ハナ先輩はとても優秀です。それに、その……もう、そんなにチャンスが……」

え？ わ、私？ チャンスって、何の！

「ハナ先輩、王都で行われる騎士の採用試験には、きつと氷の将軍もいらっしやるはずですよ！」

こ、氷の将軍？

「だから、行くべきですよ！」

え？ えええ？ なんて、氷の将軍がいると、私が行くべきなの？

「ははははっ。確かに、行き遅れだもんなあ。チャンス欲しいよなあ」

「いい後輩持ったな。ははは。後輩としても先に行くだけじゃ後ろめたいか」

どつと兵たちから笑いが起きる。

「馬鹿じゃない。氷の将軍とお近づきになてなれるはずないじゃないっ」

「みつともない。必死すぎ」

巫女たちからはそんな冷たい声があがる。

ああ、そうか！ そういえば私、氷の将軍に片思いしているってことになってたんだ。

ち、違う、別に、氷の将軍なんてただの言い訳に使っただけで……

そんなことを考えていると、昨日第二治療テントで癒いよした兵が声をあげた。

「あのっ、巫女様は、本当に優秀です。俺の傷を見ただけで、目が悪いことまで気が付いて、治してくれっ！」

え？

「わ、私もハナ先輩がいいと思います。包帯の巻き方も上手ですし、それから、癒いよしだけじゃなくて、体を温めて頭を冷やすといいとか……いろいろ教えてくれます」

巫女の一人もおおずおおずと声をあげた。いや、あの……。なんだか、私を行かせようっていう勢力が。……いや、いいです。行かないです。氷の将軍の話は嘘だし。

「まあ、そうだな。俺にもものおじせずに、ちゃんと休めと言うような奴は他にはいないし」

ガルン隊長まで何納得したように、首を縦に振っているんですかっ！

やだ、ちょっと、私、別に王都なんて行きたくないだけっ！

「他にもう一人。希望者はいないか」

すつと美しい所作で手が拳がった。マリーゼだ。
え、待って、ちよつと、マリーゼと一緒に……？ 王都まで半月一緒？ あ、往復すると一か月。滞在期間を含めると……結構あるな。

マリーゼって、私を目の敵かたみにしてるし、旅の行程を想像するとちよつと、大変そうなんだけど。私、希望いらいとしてないから、誰か別の人……そうだ、マリーゼの従妹いとことか推薦してみよう。きよろきよると従妹いとこの姿を探すと、ユーナと目が合った。

「よかったですね、ハナ先輩！ 氷の将軍はきつと騎士採用試験に来るはずだから……あのワンピース着て、ちゃんと化粧して眼鏡とマスクは外して行つてくださいね！」

ユーナの目がキラキラしている。

ごめん……あのワンピース、もう血のシミだらけで……と、言えるわけもなく。

「分かった。ありがとう、ユーナも……幸せにね！」

あああ、王都に行きたくないって言えなかったよお。

「マリーゼ、お前は どうするんだ？ 騎士の採用試験受けに行くのか？」

え？ マリーゼ？

振り返ると、マリーゼが同じ年くらいの兵たちに囲まれて、背中や肩をポンポン叩かれていた。

「いや、騎士になるより兵として出世したい」

「お前、この間三番槍になったもんな。一番槍になって、ゆくゆくは隊長になりたいって言ってるけど、騎士になれるチャンスだつてそうないぞ？」

あら、あら、あら！

「マリーゼ、頑張ったのね！ この若さで三番槍なんてすごいじゃないっ！ 毎日豆をつぶして練習していたかいたわね！」

思わず嬉しくなつてマリーゼの手を取る。

すると、マリーゼが慌てて私の手を振り払った。

「う、うわあつっ」

「おい、マリーゼ、いくら行き遅れ巫女に手を取られたからつて失礼だぞ」

一人の兵がマリーゼの耳のそばで小さくお説教。

「いや、違う、え、あれ？ もしかして、昨日の……あ、あ……」

ああ、昨日のこと、ちよつとすねてるのかな。めちやくちや動揺してるように見える。

「ごめんなさいね。マリーゼが三番槍になつてたこと知らなくて。そりゃ、三番槍になるくらいだもの。手の皮がすっかり厚くなってるなんて当たり前前よね。昨日は手のひらを確認するようにな真似してごめんなさい」

ぺこりと謝ると、マリーゼの顔が真っ赤になっている。

え？ 私、何か失敗した？ 皆の前で手の豆つぶしてた過去とか言うべきじゃなかった？ 重ね

重ね悪いことをしてしまった……

「あの、ハ、ハナ巫女は、王都、行くんですよね？」

「そうみたい……」